

ここはカナダじゃない

そいつは、初めての海外旅行ではしゃいでいたのだ。  
だからお土産を買って来たはいいが渡す相手がいないので僕にくれた。  
それはどう見ても京都のお土産だったので、  
僕はどういう気持ちでこれを受け取ればいいのかわからないまま、  
さも嬉しそうに初めての海外旅行の話を聞いてあげる。  
こういう場合、辛い目に遭うのはいつだって僕のような事なかれ主義の人間だ。  
海外に行った事のない僕でも知ってる京都の話を嬉々として語るそいつの顔を、  
僕は一生忘れない。

『ここはカナダじゃない』

平塚 直隆

登場人物 男1／田中洋介

男2／板谷勝

男3／ツアーガイド

男4／タクシー運転手

男5／ホテル従業員・警管・旅行代理人

女／松井レナ

舞台には何も無い。

男が二人、リュックを背負い、キャリーバッグを引いてやってきた。

厚手の上着を着て、首にはマフラーを巻いている。

男1 ここが、カナダか。

男2 ここが、カナダだ。

男1 長かったなあ、

男2 ああ、長かった。十四時間もかかるんだもの、腰がもう限界だ。

男1 しかしカナダ最大の空港と呼ばれるトロント空港は、中部国際空港に似ているね。

男2 セントレアだって大きな空港なもの、似ていて当然さ。

男1 いやいやあんなものは所詮日本で五番目の空港だよ。羽田、成田、関西、新千歳、福岡、の次だね。

男2 六番目じゃないか。

男1 ちょうど今一個下がったんだ、これが最新さ。

男2 相変わらずだな。

男1 だいたい名古屋なんかにあんな大きな空港要らないんだよ。名古屋には名古屋空港があるんだから今まで同様、自衛隊と半分こして使ってた方がいいんだ。偉そうに国際空港なんて名乗りやがって、調子に乗ってたよあいつら。

男2 あいつらって一体誰の事を言ってるんだい。

男1 ちょっと板谷君、せっかくカナダに来たのに名古屋の話はよしてくれないか、味噌カツ臭

くなる。

男2 そうだった。さて、どこかにガイドが居ると思うんだが、

男1 ガイドもやっぱりカナダ人なのかな。

男2 そうかもしれないね、さすがに日本語は話せると思うけど。

男1 君は海外慣れてるからいいけど僕は初めてだから不安でしようがないぞ。

男2 俺だって慣れてる訳じゃないぜ、一度韓国に行った事しかないんだ。

男1 そうだったのか、じゃあ僕と大して変わらないな。

男2 いや変わるだろう、一回とゼロは全然大丈夫。

男1 韓国なんて北海道みたいなもんだ。

男2 怒られるぞ、どっちからも。

男1 しかしどこを見ても日本語が書いてあるんだな、日本も偉くなったもんだ。

男2 空港だからだよ、街に行けばそんな事はない。確か、カナダは英語とフランス語なんじゃないかな、公用語が。

男1 二つもあるのかい？

男2 そうなんだ。

男1 おいおい、参っちゃっなあ！

ポロシャツにジーン姿の男3がやってくる。

手には「Iraya / Tanaka」と書かれたスケッチブックを持っている。

男1 お、あれじゃないか？

男2 ああ、あれだあれだ。…、こんにちは！

男3 ？

男1 コンニチハ。

男3 ああーHello, nice to meet you.

男2 Nice to meet you.

男1 ナイスチューミーチュー。

男3 I'm your tour guide Yoichiro Marnuo.

男2 まるおよういちろうさん。

男1 あー、マイネームイズ、タナカ、ああ、ヨースケ、タナカ。

男3 Mr.Tanaka, Welcome to Japan, Welcome to Nagoya.

男1 おー、(親指を立てて) イエスイエス。

男2 My name is Masaru Itaya.

男3 Mr.Itaya, Welcome.

男2 Nice to meet you.

男3 I'm sorry, I can only speak very little English, because this isn't my usual field of work.

The person in charge caught a cold and won't be able to come in today.

男1 …なんて？

男2 …全然わかんない。

男1 …おいどうなってんだよ、ガイドが英語しか喋れないってどういうことだよ…

男2 あー、We are Japanese only sorry…あー

男3 日本語でいいですよ？

男1・2 …！

男3 日本語 お上手ですね。

男2 丸尾さんこそ…。

男3 いや私、日本人なんで。

男2 そうなんですなあ？！道理でおもいつき日本人みたいな顔と名前だ！

男3 すいません、コテコテの日本人なんです。

男1 なんだそうなんですか！

男3 え、じゃあもしかしてお二人もコテコテの？

男1 コテコテですよ！

男2 はい！

男3 そうだったんですかあ！？確かにお名前と顔がおもいつき…、ああ、そうでしたかあ！

男1 いやあ、安心しました。一時はどうなる事かと。

男2 はい！

男3 いや私ももしかしてとは思ったんですよ、でも日本人がわざわざこんな所に旅行に来ないよなって思ってた。

男1 え、来ないんですか日本人。

男3 まあ地元の人とかは遊びに来るかもしれないですけど、わざわざ飛行機乗っては来ないじゃないですか。

男1 なんだ、もつと人気なのかと思ってたよ。

男2 そうだね。

男3 驚きました、ははは。

男1・2 うちこそ、ははは。

男3 改めまして、私、今回のガイドを務めさせていただきます、丸尾と申します。

男2 板谷です。

男1 田中です。

男3 あの、私、今回急ぎよ呼ばれた代役で、本来来るはずだった人間が風邪をひいてしまったらしく、その人ならばちゃんと英語が話せるんですけど、私、実はそんなに喋れなくて、

男1 いやいや、流暢な英語で話されても僕ら分らないですから

男3 そうなんですか？

男1 そりゃあそうですよ！

男3 ああ…。

男2 結果的に良かったですよ、お互いにとって。

男3 そう、ですね…。

男1 よろしくお願います。

男2 よろしくお願います。

男3 こちらこそ、よろしくお願います。じゃあさっそくですが、いったんタクシーでホテルまで向かいましょうか。

男2 はい。

男1 お願いします。

男3 いやあ、日本の方なら私必要ないかもしれないですね。ははは。

男1 いやいや、あなたが居ないと何もできませんよ。

男3 そうですかあ？

男1 私、海外は初めてなんです。

男3 は？

男1 こいつは韓国に行った事があるんですけどね。

男2 言わなくていいだろ、そんな事。  
男1 いいじゃないかよ。  
男2 韓国だったらすぐなんですかよね、  
男3 ああ。  
男2 名古屋からだと飛行機で二時間かからないくらいで行けるんですよ。  
男3 そうですね、それくらいですよね。  
男2 え、名古屋に存じなんですか？  
男3 …私ですか？  
男2 ええ。  
男3 …はい、今も、住んでいますからね。  
男2 ああ、そうなんですか！？  
男1 え、じゃあわざわざこの為に「ここ」？  
男3 ええ、この為に来ましたけど、  
男1 わあ、ありがとうございます！  
男2 え、いつ来られたんですか？  
男3 いや、さつき…。  
男2 えええ？！  
男1 じゃあじゃあもしかして同じ飛行機だったんじゃないですか？！  
男2 腰、やばくないですか？  
男3 え？  
男1 バカ、この人はビジネスなんだからビジネスクラスに決まってるだろ。  
男2 そうか！  
男1 ホントにわざわざすみませんホントに！  
男3 はあ。  
男2 僕らも名古屋なんですよ！  
男1 はい！  
男3 …ああ、そうなんですか。  
男1・2 はい！  
男3 あのお…、

男1・2 はい！  
男3 今回は何しにこちらへ…？  
男1 決まってるじゃないですか、観光ですよ。  
男2 はい！  
男3 …ああ。  
男4、やってくる。  
半袖半ズボンのとてもフフな格好  
男4 ブーン。  
男3 あ、どうぞ。  
男1 はい。  
男3 えっと、サンセットホテル。  
男4 かしこまりました。  
男1 日本人かな？  
男2 そうかもしれないね。  
男1 あの…、  
男4 はい？  
男1 日本人ですか？  
男4 …私ですか？  
男1 日本人だ！  
男2 すこいね。  
男4 はい？  
男1 え、日本人て多いんですか？この辺。  
男3 この辺、ですか？  
男1 ええ。  
男3 そりゃあまあ、多いですよね。  
男1 そうなんですか！うよかったあ、俺らよつと安心したよ。  
男2 良かったね。

男1 運転手さんは、いつからこの国でやられてるんですか？

男4 …何を？

男1 タクシー。

男4 タクシーは、高校卒業してからになりますね。

男1 どこにも就職せずいきなり？

男4 まあ、はい。

男2 え、高校卒業して、すぐにこっちに来たんですか？

男4 そうですね。

男2 すごい勇気だね。

男1 うん。

男4 分かりますよ、もつとあつただろうつて事ですよ、高卒でいきなりタクシーなんて

男1 だつてわざわざこつち来なくてもいいじゃないですか、

男2 うんうん。

男4 岐阜かこつちか迷つたんですけどね

男1・2 岐阜と迷つたんですか？！

男4 え、なんですか？

男1 岐阜と迷うなんて、なんてグローバルな人なんだ。

男4 はあ…

男2 どういうきっかけでその、

男4 運転が好きなんですよ僕、

男1 ただの運転好きじゃないよあんた！

男4 他にやれそうなこともなかったんで

男1 充分他の人が考えない事やつてるよ！

男4 はあ…

男2 だつて大変じゃないですか、言葉とか、文化も交通ルールも違いますし、

男1 そうだそうだ！

男4 外国の人乗せた時ですか？

男1 そうだ。

男4 まあ、それはなんとなくて、

男2 すこいなあ。

男4 向こうも分かつて乗ってますから。

男1 僕なんか話しかけられただけでアップアップしちゃう。

男4 最近だとやっぱり中国の方とか多いですけどね、

男1 ああ、こつちでもそうなんだ。

男2 すこいね、中国。

男4 なんか凄く聞いて来ますねこの人達

男3 (コホン) この後なんですけど、

男1 あ、はい！

男3 ホテルでいったん休憩していただいて、近くに地元で有名なお菓子を作っている工場があるので、そこを見学してから、夕食になります。

男1 あ、お菓子？

男2、対向車に目が行き、そのまま凝視。

男3 そこでまあ、お土産とか見ていただいたりして、

男1 あれですか、やっぱりメープルシロップを使った、何かだったりするんですか？

男3 …メープルシロップ？

男1 ええ、

男3 …まあ、海老を使った、おせんべいだと思うんですけどね、

男1 あ、海老？

男3 ええ、この辺りは、海が近いんで。

男1 ああ、そうなんですか！

男3 ええ。

男1 海だつて！

男2 ん？ああ、うん。

男1 泳げたりしますか？

男3 いや、この時期はもう無理じゃないですかね？

男1 ああ、やっぱり冷たいですか。

男3 クラゲが、ええ。

男1 あ、クラゲですか！

男3 もう、お盆過ぎたら、ひどくないですか？

男1 ふわあ、日本と同じだ。

男3 ……

男1 でも綺麗でしょうねえ、海！

男3 うーん、どうなんですかねえ、

男1 クジラとか、見れないですかね？

男3 ああ、イルカとかなら、見れるんじゃないかなかったですっけ？

男4 え？ああ、そうですね。

男3 クジラは、たぶん見れないと思いますね。

男1 そうですか。いやいや、でも海は楽しみなあ。

男3 まあ、あまり期待されない方が、ええ、

男1 だつてこっちはやっぱり、自然がアレでしょう？

男3 まあ、街の中心部よりは、ええ、

男1 楽しみですよ！

男3 ハハ。

男1 どうしたの？

男2 ん？

男1 なんか僕だけテンション上がっちゃって恥ずかしいじゃない。

男2 ああ、いや。

男1 あれ、ちよつと見せて、ガイドブック。

男2 ああ、

男2、リュックからカナダのガイドブックを取り出す。

男4 お二人は、旅行ですか？

男1 あ、はい。

男4 そうですね。

男1 私、初めてなんです海外旅行。

男4 どちらから来られたんですか？

男1 どちらからつて、僕ら日本人ですよお？

男4 ああ。

男1 こいつは韓国に行った事があるんですけどね、

男2 ……(景色を見ている)。

男1 まあ、これは言わなくてもいいんですけどね、

男4 日本からだど、どれくらいかかるんですか？

男1 覚えてないですか？十四時間ですよ。セントレアを出て、一度成田で乗り換えて、そこからトロントまで十四時間。もうヘトヘトですよ。

男4 なるほど。

男1 今日は明日に備えてすぐ寝ちゃおう。

男4 明日はどこに行くんですか？

男3 明日は常滑で常滑焼の体験をしてみらつて、

男1 はい。

男3 ……そのあとは有松の街並みを観光する予定ですな。

男1 へえー。

男2 ……

男4 外国人には喜ばれそうですね。

男3 まあね…。

男1 このナイアガラの滝つて、

男3 ……え？

男1 これ見るとなんかみんなカップみたいなの着てるんですけど、やっぱりしょ濡れになつちゃうんですか？

男3 (本を覗いて) ああ、着てますね。

男1 でしょお？僕カップ持って来てないから、どつかで買った方がいいかなと思つて。

男3 ああ、

男1 だつてすげー来るでしょお水しぶきが、ねえ！

男3 まあ、これを見る限りでは、来るでしょうねえ、

男1 びしょ濡れになると困っちゃうから、あははは。

男3 ハハ…。

男1 どつか買えるところあります？

男3 ああ、近くにイオンありましたよね？

男1 い、イオンがあるんですか？！

男3 あ、なかったかもしれないです！

男1 なんだ、びつくりするじゃないですかあ！

男3 すみません、勘違いしました。

男1、景色を眺める。

男1 まあでも最近、日本もどこも変わらなくなってるんですかね。

男3 ですね。

男2 …。

男4 さすがにカナダは見たら分かんと思えますけどね。

男3 じゃあそろそろ着いた事にしようか。

男4 もうですか？

男3 はい、着きました。

男1 ほお、これが今夜の宿ですか？

男2 …。

男3 えつと、一千二百…

男2、お金が渡されるのをじっと見ている。

男4 あのお、お二人は…

男3 はいじゃあありがと。

男3、男4を押しつける。

男4、しげしげ去る。

男3 ではこちらです。

男1 なるほどなるほど、「サンセットホテル」うん、いいね。

男2 …分りやすいね。

男1 サンセットって事は、あれでしょ、夕陽でしょ？

男2 あ、うん…

男1 ホライズンでしょ、水平線は。

男2 …

男1 ホライズンに、サンセットでしょ？インザシーでしょ？

男2 うん？ああ、そうだね。

男3 じゃあ私ちよつとチェックインして来ますんで。

男1 あ、はい。

男3、去る。

男1 あ、海が見えるよ！

男2、辺りを見回している。

男1 板倉君、ほら、見てくらん。

男2 ああ、ホントだ、海だね。

男1 綺麗だね、さすがカナダの海だね。名古屋の海とは大違いだ。あれは何色って言えばいいんだろつね、きつたない緑色をしている。

男2 …

男1 うん、実に綺麗だ。こういう海が観たかったんだ僕は。

男2 そうか…

男1 ありがとだね。

男2 …ううん。

男1 ありがと。



男2 …うん。

男3、戻ってきて、

男3 お待たせしました、えっと、板谷さんが五〇三で、田中さんが五〇五ですね。

男1 はい。

男3 じゃあどうしまししょうか二十分後にここ集合でいいですか？

男1 あ、はい。

男3 じゃあまた、のちほど。

ホテル従業員、やってきて、

男5 いらつしやいませ。

一人、ペコリと頭を下げる。

ホテル従業員、荷物を持って行く。

男1 すごいね、日本人、ほんとにたくさんいるんだね。

男2 だね。

カウンターでは、旅行者らしき女がチェックインしている。

男3 じゃあもう二十分経ったって事にして、行きましかうか。

三人、歩く。

同時に、女、去る。

男1 すごいよ板谷君、このホテル、日本人向けのホテルかもしれない。どこもかしこも日本語

で書いてあるし、テレビも日本のテレビやってた。

男2 あ！テレビつけたんだ…。

男1 うん！名古屋の変なローカルの夕方のニュースやってた。

男2 そう…。

男1 まるで日本だぜ。

男2 せっかくカナダに来たのにこめんね…。

男1 いやいや僕は助かる、寝る時くらいは気楽にしたいから。

男2 …ああ、良かった。

男4、やってくる。

男4 どちらまで？

男3 …。

男1 あ、またさっきの運転手さんだ。

男3 もしかして待ってた？

男4 どうぞ。

男3 …とりあえず、えびせんべいの里に行つて、そこで待っててもらつていいですか？

男4 愛知県知多郡えびせんべいの里、了解。

男3 …。

男1 (吹き出し) えびせんべいの里だつて。

男2 あ、うん…。

男1 和訳にしたらかっこ悪いね。

男2 …そっだね。

男3 …。

男4 ぴびー、ぴびー、ぴびー…、すみませんね。その車変な止め方してるもんで。どこの車

だらあ、名古屋ナンバーだよ。こういう止め方するんですよ、名古屋の人は。豊田や三河ナンバーの車は綺麗に停めてるんですけどね。

走り出すタクシー。

男1 ナンバープレートつてき…  
 男2 え、ナンバープレートがなに？  
 男1 日本と同じなんだね。  
 男2 あ、ああ！そうみたいだね！  
 男1 すごいねカナダ、アメリカと同じかと思ったら日本なんだね。  
 男2 親近感湧くよね！  
 男4 違うと思いますけどね。  
 男3 …。  
 男1 あれかな、飾ってるのかな？  
 男2 うん、そうだよ、日本人向けのホテルだもんね！  
 男1 だって日本だって外車飾ってるカフェとかあるもんね。  
 男2 うん、あるある！  
 男4 ほら、海が近いですよ。  
 男1 本当だ！  
 男2 いいね！  
 男4 これはね、左側通行だから近いんですよ。  
 男2 なるほどね…。  
 男4 あ、「生まれ」の標識がある。止まらなきゃ。  
 男3 運転手さん、ちよつと黙ろうか。  
 男4 はい。  
 男2 …。  
 男3 …。  
 男1 あれですか？こは、テーマパーク的なところですか？  
 男3 …はい？  
 男1 カナダの、日本村みたいな。  
 男2 あ、そうかもしれない！三重スペイン村があるもの。  
 男1 東京ドイツ村つてあるでしょ。  
 男2 あるある…！  
 男1 だけどあれは千葉なんだけどもね。

男2 千葉め！  
 男1 千葉つてもはや東京なのかもしれないね。  
 男2 じゃあカナダも名古屋なのかもしれないね！  
 男1 は？  
 男2 …。  
 男1 …。  
 男2 それはないね。  
 男1 それはないよ、ある訳ない。  
 男2 だよな。  
 男1 だってカナダだもの。  
 男2 うん！  
 男3 …。

窓の外を見る二人

男2、額の汗を拭っている。

男4 音楽でも掛けましょうか。

男3 あ、いいですね。お願いできますか？

男4、オーディオのスイッチを入れると、和風の音楽。

男3 … (うつむく)。あのお、本当に申し訳ないんですけど、会社から必ず言うように言われている事があるんで言いますね…。

男3、文面を出して

男3 「Nagoya is the third-largest city in Japan, following only to Tokyo and Osaka. As the largest city in the Chubu region, it is the center of government, economy, culture, and transportation of the region. Nagoya is the site of multiple historical events. From

Japanese Mythology, Yamato Takeru's sword Kusanagi, or the "Grass cutter," is now housed in the Atsuta Shrine. Nearby is the birthplace of Minamoto no Yoritomo, who established the Kamakura shogunate. Oda Nobunaga, Toyotomi Hideyoshi, and Tokugawa Ieyasu, who played key roles in the Sengoku era, "Age of Civil War," and ultimately unified Japan, all were deeply linked to this region, and is remembered by the locals as Saneketsu, the "Three Great Heroes." …まだあるんですけど、あの英語分かりますか。

男2 まったくわからないです。

男3 …日本語で言いますね。「三名古屋は、東京、大阪に次ぐ、全国

男2 もついでです。

男3 はい。

ラジオから流れる音楽が響く。

男3 しかしあれですね、天気良くて良かったですね、今日。

男4 …。

男3 夕焼けが、海を照らして、山を照らして、僕らを照らす。

男4 …。

男3 ね、運転手さん。

男4 あ、私に言ってます？

男3 あれでしょ、こう天気がいいと、やっぱり走りやすいですよ。

男4 …。

男3 濡れてるよりはいいですよ、やっぱり。

男4 …。

男3 滑りますからね。

男4 …。

男3 路面が。

男4 …は？

男3 おや、あれはなんですかあ、ひまわり畑があるんですね。どうしますか、寄っていきますか。

す。

男1・2 …。

男3 はい…。

男4 …。

男3 …。

男1 ちょっとラジオ切っても大丈夫ですか？

男4 はい。

男1 ガイドさん。

男3 …はい。

男1 僕ら、飛行機乗って来たんですね。

男3 はい…。

男1 中部国際空港から成田まで行って、そこからトロントまで十四時間…。

男3 はい…。

男1 え、寝てた？

男2 …俺は、ちよつと、うん、

男1 僕ね、寝てないんだよ。

男2 あ、そうなんだ。

男1 あの、興奮しちゃって、

男2 うん…。

男1 だからさ、十四時間はちゃんと十四時間として体験してるのね、

男2 うん。

男1 あれ？飛行機って、乗り間違えたりしないですよ、ね？電車じゃないんですから、

男3 まあ、はい。

男1 てことはさ、ちゃんと目的地に着いてる訳ですよ？

男3 …ですね。

男1 そうだ板谷君、来た時の搭乗券持ってる？

男2 あ、着いた時に捨てちゃった、

男1 ああ、

男2 ごめん。

男1 うんいいよ、僕持っているから

男2 ああ、

男1 初めての海外旅行だからさ、とっておいたんだ、記念にね

男2 やったね。

男1、小バッグから搭乗券を取り出したついでにパスポートを落とす。

男1 ここにさ、書いてあるんですけどね、「From Naria to Toronto」これ書いてあるよね？

男2 ……うん…。

男1 見てくださいコレ！

男3 ……あ、書いてありますね。

男1 でしょおっ！

男4 ホントだ…。

男1 でしょおっ！…ってことはさ、

男3 うーん…、

男4 ……、

男1 似てるね、日本にね、

男2 そうだよな…。

しばしの間。

男4 じゃあ着きますね。

男3 うん。

男4 キキキ。

男3 はい、着きましたー。えーこちらが…、えびせんべいの里になります。

男1と男2、外の景色を、警戒するように見回す。

男3 えー、あ、これ割引券です。じゃあこちらが、一時間の自由行動になりますね。…一時間

も要らないですかね、じゃあ五分にしましょうか。私達はこの駐車場で待ってますんで、行ってらっしゃいませ。

男1と男2、店内へ移動。

男3 ……波風立たせないでくれる？

男4 ……。

男4、たばこを吹かす。

男3と男4、駐車場へ移動。

店内では、さきほどホテルにいた女が一人、試食などをしている。

男1と男2、上着を脱ぐ。

男1 ……なるほどこれが、えびせんべいの里か。

男2 ……これが、えびせんべいの里だ。

男1 あの、空港とかさ、サービスエリアとかで売ってるよね、よく、

男2 そうそう。

男1 美味しいよね、

男2 うん、美味しい。

男1 ……。

男2 ……。

男1 なんだろう、来た事あるかもしれない。

男2 あ、ホント？

男1 うん、なんだろうこれは。

男2 なんだろうね。

男1 うん。

男2 実はね、

男1 うん。

男2 俺も。

男1 あ、ホント？

男2 うん。なにコレ。

男1 なんだろう。

男2 なんだろう。

男1 …。

男2 …。

男1 デジャブかな？

男2 …あ、デジャブ？

男1 うん。

男2 なるほどね、

男1 そうだよ。

男2 …。

男1 …。

男2 すごいはっきりしたデジャブだな。

男1、割引券を握りつぶして捨てる。

そそくさとタクシーに戻り、

男1 すいません、もういいです。

男3 あ、もういいんですか？

男1 はい、もういいです。

この時、女は割引券のゴミに気づいて拾い、去る途中、パスポートにも気づき拾う。  
中身を確認して、辺りを見回し、去る。

男3 あ、じゃあ、この後は、…魚ひろはってところに行きますね。

男1・2 はい。

男3 この辺りは大きなエビフライが有名なお店があるんですね、

男1・2 はい、知ってます。

男3 あ、やっぱり、そちらで夕食になるんですけど、…まだちょっと時間が早いので、うんと

…。

男4 お城でも観に行きますか？

男3 お城？

男4 ええ、ここから高速道路で三十分くらい走ると、大きな街に着くんですね。そこにはお城があつて、その街はお城で持つてると言われるくらい立派なお城なんです。お城の屋根には、金で出来た伝説の魚が飾られていて、つがいで、それをこの国でもっとも有名な泥棒が、大きな凧に乗つてお城の屋根に飛び降りて盗もつとしたらしいんですけど、それはマンガらしいです。

男3 どういう説明なんだそれは…。

男4 行きます？

男3 運転手さん、お城は予定に入つてないからさ、

男4 いいですよ、料金とかありませんから。

男3 でもさ、

男4 確認した方が良くないですか？

男3 …。

男1 いいや。

男2 う、うん、いいよね。

男1 うん、カナダのお城なんか観たつて面白くないもの。

男2 うん、そうだよ。僕らがカナダに来た目的は大自然を堪能しに来た訳だしね。

男1 そうそう。金のシヤチホコなんか今更観たつてしょうがないもん。

男2 行きません。

男4 怖いですか？

男1 は、何が？何が怖いのか？そんなの怖い訳ないじゃん、お城が怖い人間なんて戦国時代の足

男4 じゃあ行きましようよ。

男1 …。

男2 もういいです、ホテル帰りましよう。ホテル帰つて部屋に閉じ籠つてUNOやるんで僕た

ち。

男4 現実から目を背けてどうするんですか？あなた達、そんな後ろ向きな旅を明日も続けるんですか？何が楽しいんですか？

男3 ……運転手さん、そんなに言わなくてもいいじゃないか、人それぞれ楽しみ方は違うんだからさ。

男1 わかりました。いいですよ、行きましょう。

男2 田中君？

男1 いいじゃん行こうよ板谷君。カナダのお城だつてさ、いい度胸してんじゃねえか運転手。僕らがどこから来たか知らずにそんな事言つてんだぜ。そんなの余裕の鼻歌混じりで観てるよな。あー楽しみだなあ！

男4 着きました。

男1 んぐつ…！

男1、見上げた顔を思わず手で覆つてしまつた。  
ため息を吐く男2。

男4 どうですか？

男1 ……ああ、なるほどですね。いやあ、そうですね。うん、実に綺麗だなあ。夕陽に照らされて、なるほどあれが金の…。(歯を食いしばり) なんですしたつて？

男4 シヤチホコですね。

男1 Sachinoko?…なるほど、あんな魚が居るんですねこの国には。いやいや大したもんだ。

それが金で出来てるなんて、なんて悪趣味なんだ。凄いなあホント。

男4 中入つてみます？

男1 (即) うんいいや。

男4 そうですか。

男1 ……板谷君？板谷君、居る？

男2 居るよ。

男1 ……僕、泣いてないかな。

男2 うんまだ、かろうじて、なんとか、

男1 良かった。

男2 いいんだよ、泣いても、

男1 冗談じゃないよ泣くもんか、名古屋城見て泣くなんて僕のプライドが許さないよ。うん、泣いてたまるか…、泣くもんかー！(城に叫ぶ)

男2 田中君

男1 なーくもんかー…！

男2 ……恥ずかしいよ。

男3 じゃあもう行きましようか、いい時間ですし。

男4 エビフライですね。

男1 ……

男2 ほら、田中君、行こう。僕らの負けだ…。

男1 ……ハハ、いやあだつておかしいじゃないですか、二十万ですよ二十万、空港利用料とか訳のわからない税金とかもろもろ込みで二十五万だ、二十五万払つて、僕らは一体なにをやつとるんですかね…

男2 うん、わかるよ、とりあえずさ、行こう。

男1 板谷君はそりゃあ正社員だからこんなのはした金かもしれないけど僕は違うからさ、

男2 俺だつてはした金じゃないよ？

男1 僕は、こんな事の為にバイトを頑張つたんじゃない！

男4 バイトなんだ。

男1 この為に一週間もバイトを休んでさ！僕は、皆にカナダに行くと言つてしまつたんだぞ！

男2 そうだったのか、うん。

男1 メーブルシロップの何かとかさ、控えめだけどあくまで控えめだけと僕の中では相当自慢気にお土産買っていくつて言つちやつたんだ！

男2 うん田中君、あんまり騒いでるとそのバイトの誰かに見つかるかもしれないし、

男1 これ絶対おかしいよーなんだよコレ！だつて僕らちゃんと来たんだよ、絶対来たんだよー！

男2 うん、わかつたからさ、ちよつと落ち着こう。

男1 貴様！ガイド貴様…！

男3 僕はなんにも知らないです、ホントです…！

男1、男3にとびかかり取っ組み合いになる。  
が、お互いに力が弱いのか喧嘩慣れしていないのか、その辺でゴロゴロするばかり。

男1 ウソつけ貴様！貴様！

男2 田中君、ちよつとやめなよ田中君。

男1 詐欺だろう！金返せこの野郎！

男3 ちよつと良く考えてくださいよ、だってそんな航空会社巻き込んでまで無理ですって

男1 きつさまー！

男3 十四時間乗ったんですよね？税関通ったんですよね？パスポートどうしたんですか？

男1 パスポート？

男3 税関でハンコ押されますよね？

男1 ……そうだそれだー板谷君、パスポート！

男2 え？

男1 ちよつと見して！

男2 あ、部屋に置いて来ちゃった。

男1 なんで置いて来るの？ああいうもんは肌身離さず持つとかんとかんがね！

男2 あ、うん…

男1 もういいよ僕が見るから！（小バッグをこそこそやつて）あれ？…え、あれ？…え？

男2 ……え、無いの？

男1 ……あれ？え、ちよ、え、

男2 ……え、落とした？

男1 ……無い。え、無い、なんで？

男2 ……ホテルに置いてきたんじゃないの？

男1 いやいや、…え、え、…無い。えー、ちよつと待つてよ…（頭を抱え）十年の方にしちや

つたじゃないか、高かったのにー！

男2 ああ、そこなんだ…

男4 警察行きます？

男1 ……

男4 悪用されたりしたら大変ですよ？

男1 ……（今にも泣きそうに）うん。

警官がやってくると、そこは交番になる。

男5 どうされました？

男3 あ、あの、パスポートを、失くしちゃったんですけど、

男5 ああ、ご旅行中ですか？

男3 ……はい。

男5 どちらの国の？

男3 ああ、日本…、なんですけど、

男5 ……日本？

男3 はい…。

男5 ……うん、日本を旅行中なのは分かつとるんですけど、どちらの国のパスポートなんですか

ね？

男3 ……ええ、あの、日本なんですけど…、

男5 ん、ご本人さん？

男3 あ、私じゃなくて、この人なんですけど、

男1 ……はい。

男5 ……あ、国内旅行？

男1 ……僕、海外は初めてなんです…。

男5 ……は？

男2 あのもういいです、すいません…！

男2、男1を引っ張り、その場から逃げ出す。

男2 運転手さんもう帰りましょー！高速で、出来るだけ高速でお願いしますー！もうエビフライも

いいですー！ホテルに直行してくださいー！もう彼に「名古屋っぽい物を見せたくないんです、

お願いしますー！

男4 わかりましたー。

男1　なんで、なんで僕はっかりこんな：

男2　君は悪くないよ、なんにも悪くない。僕はただカナダに来ただけなんだ。大丈夫、明日になればきっと、何もかもが良くなってるよ。これは、悪い夢なんだ！

男4　そんな事ないと思いますけどね。

震える男1を支える男2はグッと前を見据えている。

途方に暮れる男3はぼんやりと景色を眺め、

男4はただただ呆れて運転している。

♪

蒸し暑い夕暮れの「カナダ」の街を行くタクシー

運転するのは日本人　乗っているのも日本人　それを見ている日本人

日本人　日本人

カナダには行ったことないから

カナダってどんなところか実際のところ知らないし

だからこれがカナダと言われたら

そうかもしれないと納得する日本人

そんな奴はいねえ

次の日。

男3がホテルのロビーで待っている。

男1がやってくる。

男3　あ、おはようございます。

男1　朝早くから大変ですね、ツアーガイドという仕事も。

男3　あ、いえ。

男1　おはようございます。

男3　おはようございます。昨夜はお休みになりましたか？

男1　はい、昨日はすいませんでした。

男3　とんでもないです。

男1　ようやく落ち着いて来まして。

男3　あ、それは良かったです！

男1・3　あのお、

男3　あ、どうぞ、

男1　いえ、ガイドさんから、

男3　あ、じゃあ…、あのお、あれから私、会社の方に電話してみたんですね、そしたら、うちの会社は…という、外国人向けに、ガイドを提供している会社なので、現地以外の事は把握してないそうなんですよ…、

男1　はあ。

男3　なので、田中さんの、申し込んだ旅行会社の方に連絡して貰うのがいいと思うんですけど、

男1　ええ、それで、したんですね、夜。

男3　ああ、そうですね。

男1　そしたらやっぱり、僕らカナダに来てるそうなんです。

男3　…え？

スーツ姿の男5、やってくる。

男1　トロント二泊四日の旅は間違いないみたいなんです。

男3　…は？

男5　ええ、確かにカナダ・トロント二泊四日で承っておりますね。

男1　そうですよね？

男5　航空券とホテルの手配も確認しました、もちろん現地ガイドも。

男1　丸尾さんでしたっけ？

男3　あ、ええ。

男1　丸尾さんという方なんです。

男5　すいません、名前までは、現地の会社に委託してるので。

男3　そうですね。

男5　だから大丈夫ですよ。田中さんは間違っていないです。



男1 でも皆がお前は間違ってるお前だけが間違ってる口々に言うんですよ？

男5 なぜ田中さんが間違っているのか理解できませんね。

男1 ですよねえ！

男5 だって飛行機乗れたんですよ？

男1 そうなんです。それはもう私、口が酸っぱくなるほど言ってるんですよ？それなのに

みんなバカみたいな顔して首をかきけるばかりなんですよ？

男5 ひどいですよね。

男1 ですよねえ？

男5 だって田中さん、来た時の搭乗券もあるんですよ？

男1 そうなんですよ？

男5 成田からトロントって印字されてるんですよ？

男1 そうなんですよ？

男5 じゃあ乗ってますよね。

男1 乗ってるんです。

男5 それね、

男1 ええ。

男5 ちゃんと着いてますよ。

男1 ですよね！

男5 ええ。

男1 あなたただだ、私を信じてくれるのは！

男3 その旅行会社の人はこっちに来てないからそういう…

男5 まあ後は、考えにくいですけど、航空会社が間違えてしまったという可能性もありますけど、  
ど、

男1 そんな事あるんです？

男5 まあごくまれにあるみたいですよ、海外では？

男1 え、え、そうなるよ、どうなります？

男5 中部国際空港から成田まで行って、成田からトロント行きに乗らないといけないところを  
成田から中部国際空港行きの飛行機に、間違えて乗ってしまった。

男1 くん、ごめんなさい、どういふ事？

男5 ですから、中部から成田まで行って、また戻ってきたんじゃないか。

男1 え、なんで？

男5 乗るはずの搭乗口を間違えたとか？

男1 え、誰が？

男5 田中さん達が。

男1 …え、それはいいです。だってQRコードでピッってやったんですから。

男5 違ったら止められますもんね。

男1 はい！

男5 それに、飛行機が十四時間かかっているという事実ですよ。

男1 そうなんです！私起きてましたからね。

男5 名古屋東京間は、飛行機で一時間くらいしかかからない訳です。

男1 ですよね！

男5 残りの十三時間は

男1・5 何をやとったんだ、

男5 と、そういう言う話になりますね。

男1 ですよねえ！

男5 日本上空を十三時間グルグル飛んでいたというのであれば、それはもう大ニュースになります。

男1 ですよねえ！

男5 ええ。

男1 ですよねえ！！（男3に）ほらみろ！

男3 はい…。

男5 パスポートがあれば入国審査の証明が出来るんですけどね、

男1 あ、パスポート（ポケットを探します）、

男5 失くしてしまわれたんですよ？

男1 …ごめんなさい。

男5 謝る事ではないですよ、誰にでもある事です。

男1 ありがとう！

男5 板谷さんは持つってことですか？

男1 ええ、もう一人は持つておりますので安心です！  
 男5 じゃあそれを確認していただいて、  
 男1 はい！  
 男5 現地の警察には行つて頂いたんですよね？  
 男1 はい！  
 男5 でしたらそこで紛失届けを書いてもらいましたよね？  
 男1 えつと、  
 男5 ん？  
 男1 はい！  
 男5 それを持つて、日本の大使館に行けば、仮のパスポートを貰えますので、  
 男1 はい！  
 男5 この時間でしたら大使館開いてますから、出来るだけ早く行つてください。  
 男1 分かりました！（立つ）  
 男3 でもここ海外じゃないですから、  
 男1 （座る）すぐこんな事言いだすんですよ…？  
 男3 日本に日本の大使館は無いと思つたんですよ、  
 男1 無いんだつてさ。  
 男5 いやそちらにはありますから。  
 男1 ですよええ！  
 男5 ええ。  
 男1 連れて行けよこの野郎。  
 男3 だつて探しようがないですよ？  
 男1 ガイドのくせに。  
 男3 うーん、  
 男1 僕間違つてないですよね？  
 男5 田中さんは、間違えてないです。  
 男1 てことは？  
 男5 ええ。  
 男1 来てるんですよ？やっぱりね。

男5 もちろんです。  
 男1 やつたー！  
 男3 でもそうなるんですね、  
 男1 なにもう…。  
 男3 今度は我々の方にも問題がかかつてきまして、  
 男1 は？  
 男3 私なんか特に、生まれも育ちも、ココなんですわね。  
 男1 はい。  
 男3 そうなると私は、カナダ生まれの、カナダ育ち…？  
 男1 そうなんですよ？  
 男3 …ちよつとそれは、考えにくいなあ、というか、…ええ、  
 男1 そんな事を言い出しますよきつと。  
 男5 一体この問題は、どちらの方が、大きいと言いますか、優先的に解決しなくちゃいけないかという…、今回はかりは、田中さん達の方を優先していただかないと困りますよね、お客様なんです。  
 男1 ですよええ！  
 男5 なのでそちらの問題は仕舞つて頂いて、とりあえず、  
 男1 ですよええ！客ですもんねえ！  
 男5 ええ。  
 男1 だからまあ客なんですね、客の方が、気分良く、まあ居させてもらえればなあ、思つてる次第なんです。  
 男3 …ああ、  
 男5 まあ三日間の事なんで、まあ、  
 男3 三日間だけ、カナダ人になれと…？  
 男1、ニコニコと微笑んでいる。  
 男3 …わかりました。  
 男1 カナダ人ぼくはないなあ。

男3 …イエス、カナダ。  
男1 …。

男2、やつてくる。  
そのすぐあとに男4もやつて来た。

男2 あ、おはよう…。  
男1 やあ、板谷君！  
男2 …あ、あれ？なんか、元気そう…、  
男1 ああうん、もうね、なんかもう、すつきり解決しちゃったんだ。  
男2 ああ、あ、そうなんだ…、  
男1 うん、ややこしい問題はね、全部ガイドさんに引き受けてもらっちゃったから。  
男2 …どうい事？  
男1 ン、どういう事かはもうわからないの。  
男2 あ、そう…、  
男1 え、なに？どこ行つてたの？散歩？  
男2 あ…、まあ、うん。  
男1 あのさ、パスポート持ってる？（男5に）これでもう完璧に証拠が揃いますもんね？  
男5 ですね。  
男1 （男2に）ある？  
男2 …ああ、えっと、  
男1 部屋かい？  
男2 あのさ、  
男1 えー、今度はちよつと持つて来てくれよな？もう僕のはないからさ、板谷君のだけが頼りなんだ。  
男2 あのね、家に帰つてた。  
男1 …は？…家？  
男2 うん…、  
男1 え、どこのの？

男2 まあ、家は名古屋にしかないんだけどね…、  
男1 …あそう。  
男2 そこに荷物、置いて来ちゃったからさ…、  
男1 …おいおい、なんで置いて来るのさ？大事なパスポートだろう？  
男2 だつて旅行行つてない時は、家に置いてあるから…、  
男1 …何言つてんのさ、今旅行中旅行中。  
男2 ああ、  
男4 おはようございます。  
男1 …。  
男3 …。  
男1 …そつか、じゃあ昨夜は泊まつてないんだ。  
男2 …うん。  
男1 なんだもつたないなあ、あーあ、せつかく良いホテルだったのにさあ。  
男2 ごめんね。どうしても、気になっちゃつて…、  
男1 ふーん。  
男2 …ごめん。  
男1 で、どうだったの？  
男2 …うん、まあ、いつもと変わらず？  
男1 へー。  
男2 嫁と子供も、普通に居てね、  
男1 …。  
男2 …うん。  
男1 あ、そうなんだ。  
男2 …うん。  
男1 良かったね、元気だった？  
男2 うん。まあ、一日しか経つてないからね。  
男1 あ、そつか。  
男2 …うん。

男1、男5のところに戻って来て、

男1 どうしましたしょう？こんな事を言うんですよ板谷君たら…。

男5 それはね田中さん、

男1 はい。

男5 ホームシックですよ。

男1 ホームシック？

男5 慣れない外国に来て、日本のおうちに帰りたくなっちゃったんでしょね。

男1 え、じゃあ、え、板谷君本当は、帰ってないんですか？

男5 まあ、おそらく。

男1 なんだおい、君はホームシックにかかっていたのか、早すぎるぞ！

男2 …田中君、一体誰と話してるの？

男1 旅行代理店の人だよ。僕はね、昨日旅行代理店の人と話したんだ。ガイドの丸尾さんもカナダだと認めてくれたからね、

男4 え？

男3 …へへ。

男1 ここはカナダに間違いないそうだよ、君は一体どこに帰っていたんだ、恐いぞ、ちよつと。

男2 田中君、もう諦めようよ。

男1 え、何をうなんで？だいたい君、なんで帰ってるの？おかしいじゃん。

男2 俺だって帰りたくなかったんだよ、でも、帰れたからさ…。

男1 帰れたってなんだよ、帰ろうと思わなかったら帰れないじゃないかよ。

男2 まあね…。

男1 君だな、板谷君をたぶらかしたのは。

男4 はい。

男1 「はい」だとおっ！

男4 あなたも帰ってみたらどうですか？送りますよ？

男1 なんて家に帰るんですか？意味がわからない。僕はカナダに来てるんです。カナダの大

自然を満喫しに来てるんです。さてガイドさん、僕の持っている日程では今日はナイアガラの滝に行くんです。明日にはもう名古屋に帰らなければならぬので僕たち、あのくそった

れな名古屋に。だからよろしくお願いしますね。

男3 お、おう、いえす。

男4 (スマートフォンを取り出し) これ、見てください。

男1 なんですか？

男4 グーグルの地図です。

男1 は？嫌です。

男4 コレ見てくださいほら、日本ですよ、愛知県、ここ南知多、知ってますよね？名古屋の隣

ココ空港、ほら。

男1 そんなものが信用できるもんですか、そんな小さなコンピューターの言う事なんか。ねえ旅行代理店の方？

男5 おっしゃる通りですね。今の人たちはコンピューターを信用しすぎです。

男1 そうだぞ。

男5 地図検索で現在地を確認しないと現在の場所がどこなのか分からないのですか？

男1 そうだそうだ。

男5 実際に行って体験してこそ、本当の現在地がわかるんじゃないですか？

男1 ちゃんと聞いているのか板谷君、今旅行代理店の方は実にイイ事おっしゃってるんだぞ。

男2 はい。

男5 スマホの地図はかりを見て進んでいるとあなた達、いつか自分がとんでもない場所に連れて行かれていくことすら気づかないで終わりますよ。

男1 うん。

男5 スマホの地図を見て進み、スマホ越しの景色を覗く、動画や写真を撮りそれを覗いて懐かしむ、そんなことを繰り返しているうちにいつしかコンピューターの中で作られた世界と現実との区別がつかなくなるのです。

男1 恐ろしい未来ですよねえ？

男5 そうして人は、実際にその場所へ足を運ばなくても行った気になり、そこが本当に実在しているのかすらわからない場所まで、「在る」事にしてしまうのです。それは我々、人が便利だから楽だからと好き好んでやっているのと錯覚させて本当は、何者かにそうさせられているのです。すでに洗脳されているのです。それは誰か、人工知能ですよ。すでに現代人は人工知能によってコントロールされている。そして人類がコンピューターに管理・選別される時

代がすぐそこまで迫っている。その事実には気づかなければなりません。

男1 どうだ凄い話だろう愚かな人間どもか。

男5 皆さんふと立ち止まって見直してみてください。そこは本当に日本ですか？カナダってどんな場所ですか？あなたの思っていたカナダって、本当に存在しているんですか？あなたの行った事のない場所、誰かの話や写真や映像でしか観た事のない場所、それらは本当に、存在しているのでしょうか？

男2 ……

男1 何をニヤついたりしてるんだ君は。

男2 あ、すみません。

男1 我々は十四時間飛行機に乗って来たんだ、これは実際に体験してるんだ。

男2 はい。

男1 君、腰痛かつたんだろ？それは十四時間分の蓄積があつたからではないのかね？

男2 そうです。

男1 へいタクシ、君は何を体験してるって言うんだ？ここがカナダか名古屋か、何をどう体験しとると言うんだ。

男4 私は認める訳にはいきませんね。私の生まれた場所が、カナダであつたりバーチャルな世界である訳がない。

男1 まだ言うか貴様！

男4 私はここに住んでいるんです。私の家すぐそこです。

男1 それは君がカナダ在住だからじゃないかバカ。もおガイドさん、なんとか言つてやってく

ださいよ。

男3 いいじゃないですか二人とも、私ナイアガラの場所知ってますから、ね、行きましようナイアガラ。

男4 それ喫茶店ですよ。

男3 ……いえす。

男4 モーニングに小倉トーストでも食べて、名古屋を美体験してみますか？

男1 話にならない、言ってるレベルが違うよ君。

男2 でもさ田中君、嫁と子供が居たんだよ？これはもう、疑いようもない事なんだ。

男1 なんだお前ら、皆して僕を騙してるんだろ？この町の連中全員が丸になつて僕を笑つてる

んだろ。なあ、そうなんだろ？

男2 じゃあ僕はどうなるんだよ、ひどいよ、僕まで疑うなんて。

男1 よし、ちよつと待つてろ、今旅行代理店の人に聞いてみるから。もしもし？

男5 はいはい。

男2 それ電話してたのか…。

男1 こいつらどうしよう？全く話にならないです。

男5 想像力の欠如でしょうね。

男1 ですよ！

男5 それは本当に、奥さんとお子さんでした？

男2 ……え？

男5 よく似ていたけど、別人だったんじゃないですか？

男2 ……怖い事言わないでくださいよ。

男1 うん怖い、なにそれ？

男5 お一人の居るその場所は、日本にとっても良く似ているんですよ？飛行機で十四時間かけて着いた場所が、日本と良く似ていた。そこに居る人も皆、知っている人に良く似ている。

そんな事ありませんか？

男2 ありえないと思います。

男1 僕もそう思います！

男5 しかしごく稀に、ふとしたきっかけで、自分が今まで住んでいた世界が、ちよつとだけおかしな事に気づいた人が居るんです。一見何も変わってないように見えるんですが、よく見ると文字が違う、なんの文字かもわからない見た事もない文字。普段良く知っている人の顔も、どことなく違う気がする。まるで、鏡に映したように左右が反転している様な。そんな体験をした人が割とたくさんいるんです。

男1 なにそれ怖い…。

男2 それって

男5 パラレルワールド、聞いた事ないですか？

男1 無いです！

男2 あります。

男1 あります！

男5 この世のどこかには、並行して走るもう一つの世界へ通じる扉があるそうです。  
男1 怖い、なにそれ怖い！  
男5 お二人は、いつの間にかそのもう一つの世界に入ってしまったのではないですか？  
男2 え…、  
男1 それどうやって帰るんですか？もう怖いです！  
男5 帰る方法は、最初に異変を感じた場所に戻る事です。出来るだけその場所から離れない事。  
男1 え、どこ？  
男2 どこだろう…、  
男1 えびせんべいの里だ！  
男2 いやもつと前でしよう。  
男1 え？  
男2 ホテルに着く前かな、  
男3 私は、もう空港で思いましたけどね…、  
男1 え、  
男2 嘘？  
男3 ホントです。たぶん、誰もがそう思うと思います…。  
男1 じゃあ空港だ、空港に行こう。  
男2 そうだね。  
男1 運転手さん、空港！  
男4 あなた、都市伝説大好きですね。  
男5 はい。  
男4 そういって話つて、気絶したり眠ってしまったら、記憶が飛んだりするらしいですね？  
男5 そうなんです。  
男4 そういう記憶ありますか？  
男1 ないですよ。僕はずっと起きてたんですから十四時間。  
男4 そうですか。  
男5 え、一瞬でも寝てないですか？  
男1 寝てないです。  
男4 起きてたんですよ？

男1 起きてましたよ、なんで疑うんですか？  
男5 何やってたんですか十四時間。  
男1 ずっと窓の外を見ました。  
男5 楽しかったですか？  
男1 楽しくないです。ずっと雲はつきりだったから。  
男5 よくずっと見てましたね。  
男1 他にする事もなかったし。  
男5 よく頑張りましたね。  
男1 頑張りました僕！  
男5 困った人だな…。  
男4 地続きでパラレルワールドに迷い込む話は、あまり聞いた事がないです。  
男5 だからまあ、そういう事もあるという、可能性の話ですよ。  
男4 その可能性を探るのは、時期尚早だと思いますよ。  
男1 ねえ、僕らはどうしたらいいんですか、空港、戻らなくていいんですか？  
男4 空港に戻ったところで現実を受け入れられますか？家に帰ってみるのが一番だと思うんですけどね。  
男1 家に帰ったつてしょうがないですよ、もう彼女は居ないんですから…。  
男4 彼女？  
男1 とにかく！ここはカナダではないという証拠をあなた方は何一つ出したらんじゃないですか。こっちはここが日本ではないという証拠をいくつも出してるんだぞ。  
男4 証拠はないですよ、超常現象の可能性を言うてるだけで。  
男5 搭乗券はどうなんですか？立派な証拠じゃないんですか？  
男1 そうだ、これだ！（取り出して見せる）  
男4 ちょっと見せてください。  
男1 いいよ。  
男4 男4、印字をこする。  
男1 ちょっと、汚くしないで。

男4 確かに細工の痕はないですね…。

男1 ほらみる、もう返して。

男5 他に疑いの余地ありますか？

男4 …。

男3 もういいじゃないですか、カナダって事にしましょうよ。

男5 事にじゃないですよね。

男3 はい、ここはカナダです！だから今日は、カナダっぽいところに行きましょう。

男5 ぼい？

男3 カナダにだってカナダらしくないけど景色のいいところありますから、

男1 カナダのカナダらしいところに行きたいんですけどね僕。

男3 そうですね…。

男2 運転手さん、これは確かに難しいですよ。ここが日本だと証明するなんて、疑いさえキリがない。

男4 …そういう訳にはいかないです。ここが日本じゃないと認めてしまえば、僕は日本人ではなくなるし、あなたの奥さんもお子さんも、よく似た別人という事になりますよ。

男2 …うん。

男5 よく似た別人ではない事を証明する事だつて難しいでしょう。どうしたらその人がその人だという証拠になるんですか？それはもうフリーリングでしょう？そんな個人的な感覚は証拠にならないでしょう。

男1 そうだぞ！

男4 あなたたちには日本人の誇りはないんですか？

男5 それはあなたが日本に生まれたと思ってるからでしょう？カナダに生まれたらカナダ人の誇りになるんです。たまたま生まれた場所が日本だから日本人としての誇りが植えつけられる訳で、愛国心など偶然の産物に過ぎないですよ、結局環境ですね。

男3 もうヤダ、もう行きましよう。カナダ観光に行きましよう！今日一日、楽しく過ごしましよう！

男4 旅行代理店の方、そちらは今何時ですか？

男5 朝の九時ですか？

男4 そうですか。

男5 それが何か？

男4 こちらも九時なんですよ。

男5 …。

男1 だからなんだよ？九時に電話してるんだから向こうも九時なのは当たり前だろう。

男4 時差はないんですかね、日本とカナダ。

男1 …時差？

男2 そうだ、確か十三時間くらいあるんじゃないかな。そうガイドブックに書いてあった。

男1 十三時間？

男2 カナダの方が遅いんだよ。

男4 成田を何時に出発しました？

男2 夕方の四時何分か、忘れちゃったけど、

男4 四時ちょうどに成田を出たとしましよう。十四時間かけてカナダに着いても、十三時間遅いんだから到着するのは？

男2 …その日の、五時？

男5 …。

男4 何かに気づきませんか？この一時間。

男5 成田から中部国際空港までの時間。

男4 そうです。

男1 いやちよつと待つてよ…、え、いやいや、

男3 やつぱり乗り間違えてる…？！

この辺りから少し離れたところに女が立つて、様子を伺っている。

男1 嘘だろ、おい…。

男4 おかしいと思っただんですよね、十四時間もずつと窓の景色を覗いているなんて。そうですね、一時間くらいなら見ていられるかもしれない。

男1 そんなのありえないでしょう、十四時間と二時間を間違えるなんて、いくらなんでも、

男4 ずつと窓の外を覗いていたんですよね？時計も見ずにずつと。

男1 …。

男4 時間の感見なんて曖昧になっていくんじゃないですか？あなたは現に初めての海外旅行で興奮していた。十四時間があつという間に感じた事でしょう。それはそうです、一時間だったんですから。

男1 冗談じゃないよ、そんな、こゝまでやってきて…、ただの乗り間違いの話なんですかこれは？ただの乗り間違えだったと終わらせる気かよあんた！

男5 …。

男4 あなた方が悪い訳じゃない。機械の故障なのか偶然通ってしまった搭乗口。そして偶然にも空席だった席に座っていたお一人に、誰も気づかなかった客室乗務員。幾つもの偶然が重なったんです。誰かを責めても意味がない。心中、お察しします。

男1、がつくりと膝をつく。

男3 …行きましょうか。観光、いい所たくさんありますから。

男1 …はい。

捕まった犯人のように、立ち上がり、

男2 行こう。

男2に支えられ、歩き出す。

男4 今日は走りますよ、こゝこゝでも。

男1 お世話になります。

男2 よろしくお願いします。

四人、戦友のように歩いていく。

その先に居る女、男1の顔をのぞき込み、

女 あのお、コレ落としませんでした？

と、パスポートを差し出す。

男1 …！

男1、そのパスポートを荒々しくめくり、

男1 これだ！これですよこれですよコレ！旅行代理店の方…コレ！

男5 やりましたね！

男1 どうだ見ろ！これを見る愚民ども！ここにちゃんと証拠の印が押されてあるだろう！どうだ…！これが、証拠だ…！

男5 これはもう間違いない、入国審査ですから、確かな証拠です。

男1 入国したんだ、私は…

男5 国内旅行でパスポートを出してきたらそいつはもっとうかしている。だいたいそういう場所がない、税関が。そもそもが国内線と国際線の搭乗口を間違えるなんてそんなバカな話があるか！謝りなさいよ皆、バカ、バカが三人、バカみたいな顔並べとかなと、この人に謝りなさいよ！

三人…。

男5 なんか喋んなさい！何を笑つとるんだ！バカものが、バカが三人。三人…！

男1 やった…、(女に) ありがとう、ありがとう…、あなたのおかげで私の汚名は晴らされた。

女 それは良かったです。よっぽど大切な物だったんですね。

男1 そうなんです、ありがとうございます。

女 いえ。

男1 私がイメージしていたカナダ人はあなたのような優しい人でした。ところが今のところ実際に会ったカナダ人は、狡猾に私を騙す輩しかいなかったのです。

男5 (男3と男4に) 君たちの事だよ！

男1 このままではずっと私はカナダを恨んで、もう一度この地を訪れる事はなかったでしょう。



女 そうですか。そんなに大きな事だったんですね。

男1 何かお礼がしたいのですが、

女 お礼なんてそんな。

男1 じゃあせてお名前を。

女 松井です。

男1 松井さん。

女 松井レナです。

男1 ああ、日本の方なんですね。

女 はい、浜松から来ました。

男1 ああ、浜松から。

女 常滑焼を勉強したくて。

男1 ああ、常滑焼。

女 はい。

男1 器とか、お茶碗とか？

女 そうですね、はい。

男1 なるほど。

女 ここから常滑は近いですから。

男1 ああ。

女 父が定年退職するので、手作りの徳利をプレゼントしたいんです。

男1 実にいい娘さんだな。

女 ふふ。

ひびく長い沈黙。

男1 ありがとう。(男たちに向き直り) さあ皆さん、すべてが丸く収まりましたよ。今日からが新しい旅の始まりです。ガイドさん、早く僕らをどこかへ連れて行ってください。

男3 わかりました。じゃあ行きましょう！

男1 はい！ほら、板倉君。

男2 あ、うん…。

男4 全く丸く収まっていません。

男1 はーあ…。

男4 ここは、カナダではありません。ありません。ありません。

男3 もつさ、いいじゃないかよもつ…。

男1 君はなんだ、クレマーかい？

男5 これ以上決定的な証拠はないでしょう？もう認めたらいかがですか？

男4 何を認めると言ってますか。

男3 私はもつどつちでもいいですよ、ここがカナダだろうが日本だろうが。

男4 どつちでもよくありません。ずっと日本人だと思つて生きてきたのにいきなりカナダ人だと言われても困ります。

男3 呼び名が変わるだけじゃないですか、人類皆兄弟、ね、同じ人間なんだ。いいじゃないか別に。

男4 日本を守る為命をかけて戦つてくれた先人たちに、「今更すいませんがあなたはカナダ人でした」なんて言えますか？

男3 …いや、それはさ、

男4 靖国神社で、手を合わせて、「カナダ人でした」って。

男3 …。

男1 申し訳ないけどそれはもうそつちでやってくれませんか？カナダの事はカナダの人達が考えてください。我々日本人はこれから日本に良く似たカナダの場所を観光してくるので。

男4 先ほどの時差の問題なんですが、

男1 えーまたぶり返すのお？

男5 それがなんですか？

男4 そちらも九時なんですよね？

男5 はい。

男4 そろそろ引つかかるんですよね、時差が十二時間あるのだとしたら、そちらは夜の八時のはずです。どうして、朝の九時なんですかね？

男5 …。

男4 同じ場所にいるんじゃないですか、あなたも？

男5 そちらの状況が全分らないので私には、日本と良く似ている場所と言っているが、ど

ういう場所なのか検討も付かんのですよ。まあ、こんな事は言いたくないのですが、私はあなた方が私をからかっているという可能性も捨てないんですよ。

男4 わかりました。では今からそちらに行ってもいいですか？

男5 ああ、いいですよ。

男4 どちらですか？

男5 名古屋のオフィスに居ますよ。熱田区の金山駅の向かいのビルです。

男4 わかりました向かいます、これから皆で。

男5 じゃあ夜の十一時まで待ってますね。

男4 いえ一時間でいきます。

男5 それは楽しみなあ。

男4 そうおっしゃるから来たんです。

男5 来たんですね。

男4 あれからすぐ出ました。

男5 そうですか。

男1 ……どうも。

男5 田中さんと、板谷さんだ。

男2 どうも…。

男5 ……あれ？行かなかったんですか？カナダ。

男1 ……行きました。

男5 帰ってきちゃったんですか？

男1 ……帰ってないんですけど、

男5 じゃあなんで居るんですか？

男1 うんと…。

男2 搭乗券とパスポート見せたら？

男1 ああ、

男1、搭乗券とパスポートを渡す。

男5 確かに書いてありますね。

男1 でしょ。

男5 どうなってるんですかね？

男1 ……どうなってるんですよ？

男5 でもどうなってるのか考えるのめんどくさいですねびびく。

男1 え？

男5 あとなんか怖い。

男1 怖い？

男5 向こうで事故にあつたりしてないですよ？

男1 ……どういう事？

男5 いやいいです。とにかくもう、帰ってください。

男2 え、ちよつと…

男5 だってなんか怖いもん、なんで居るの？

男1 なんて言われても、ねえ？

男2 うん…。

男4 ひとつだけ答えてください、ここはどこですか？

男5 ここは名古屋に決まってるだろう。

男4 カナダではないんですね？

男5 カナダの訳ないでしょうがバカ。バカじゃないのもう。なんなんだ君たちは。気持ち悪い

なあ。気持ち悪い顔して。

男2 顔は関係ないんじゃないですか？

男5 顔に出るんですよ気持ち悪いのが。変な気持ち悪いオーラまどつてるよ。

男1 ひどいなこの人。

男5 それはこっちの台詞だよ、散々弁護してあげたのに、あんな馬鹿みたいな都市伝説の話までしてさ、もう時間返してちょ。気持ち悪い顔して。

男2 ……もう行こう、田中君。

男1 ……うん。

男5 もう帰れ帰れ、一度と来るなよ、バカ。

男5、搭乗券とパスポートを投げつけて去る。

男1 ……

男1、それを大事そうに拾う。

男3 そこまで言わなくてもいいじゃないですかね。

男1 ……

男3 お昼ごはんでも食べに行きますから、味噌煮込みうどんとか、ひつまぶしとか、

男1 ……いや、お腹空いてない。

男3 そうですか…。

女 あのお、

男1 ……あ、あれ？

男2 まだ、居たんだ。

女 カナダに来たんですね？

男1 え？

女 日本からカナダに。

男1 ……まあ、そのはずだったんですけど、

女 私もなんです。

男1 ……へ？

明転。

公園のベンチ。

小鳥が囀る中、話を聞いている。どこのCMかのような印象。

女 三年前ですね、私がカナダに来たのは。

男1 三年前？

女 語学留学という名目で。本当はただ日本から離れたかっただけなんですけど。

男1 ああ。

女 いろいろと、人間関係とか、将来の事とか、考えてたらなんかぐちゃぐちゃになってしまっ

て、精神的におかしくなっていましたね。

男1 なるほど。

女 私、海外なんか一度も行った事なかったんですけど、英語も喋れないし、でもこのまま日本に居ても何も変わらないなと思つて。生きてるのに死んでるみたいな時間を過ごすくらいなら、死ぬ気になって外に出てみようかなあとか思つてた時に、たまたまテレビでカナダの旅の番組とかやってて、あーカナダいいなあと思つて、

男1 うん。

女 それからはもうあんまり深く考えてなかったですね。もちろん不安はありましたけど、それよりも開き直りの方が強かったんだと思います。

女、何かに餌をやっている素振り。

女 それで、ワクワクしながらいざカナダに来てみると、日本と全く一緒じゃないですか、

男1 驚いたでしょう？

女 驚きました。もうパニックですよ、えー、嘘ー？！って、

男1 ですよ。

女 そのあと、家に帰ってみたら親が居て、あれだけタンカ切つて出て行った割にすぐ帰つて来た私に呆気に取られて、まあ私も呆気に取られてたんですけど、

男1 (微笑) ええ。

女 でもなんだろう、その日はたくさん話をしましたね。本当に久しぶりに、たくさん。

男1 警戒心はなかったんですか？何か得体の知れないものに巻き込まれているような感覚は

女 それはありましたね。だから出来るだけ出かけるようになりました。知り合いにも会つたり、話を聞いてもらつたり。

男1 バカにされませんでした？

女 いいえ、皆、親身になつて話を聞いてくれました。

男1 そうですか。

女 まあ確かに心の底では、やっぱりどこか疑いの気持ちはずっとあったんですけど、そういう疑いの気持ちがあるんでしょう、楽しいって言うか、探求心みたいな？そんな感じになつてきて、私、日本に居た時は、すべてにおいてなんにも興味がなかったんだなって気づいて、

男1 …ええ。

女 だから今の方がずっと楽しいですね。いろんな事やってみたいし、知りたいし、人にも優しくなったような気がします、だから父に常滑焼とか、

男1 ああ。

女 興味のある事はすぐに行動出来るようになりましたし、うん、生きてるといふ実感は凄くありますね今。

男1 なるほど。

女 はい。

男1 最後にお聞きしたいんですが、松井さんにとって、ここはどこですか？

女 ここはカナダです。

男1 そうですか。本日はお忙しい中ありがとうございました。

女 こちらこそ。

二人、お辞儀をして立ち上がる。

男1 日本に帰ろうとは思わないんですか？

女 うーん、そうですね、今はカナダにある浜松の大学に通っているので、卒業したら、帰ってみてもいいかもしれないですね。きつとすぐまた戻ってこると思いますが。

男1 なるほど。

女 田中さんは、どうされるんですか？

男1 …僕は、

女 帰りの飛行機が決まってるんですって？

男1 そうなんです。

女 じゃあ明日には帰国されるんですね。

男1 ええ…。

女 今のうちに行きたいところに行って、会いたい人に会っておいた方がいいですよ。せっかくここは、カナダなんですから。

男1 …はい。

男1、歩いていき

女 そういう話はしましたけど、

隅の方で膝を抱えて座る。

女 そのあとどこに行ったのかは、すいません、わかりません。

男3 困ったなあ、どへ行っちゃったのかなあ。

女 私、余計な事言っちゃいました？

男3 あ、いえ、あなたのせいじゃないです。板谷さん、検討しますか？

男2 …ええまあ、なんとなく。

男3 …

男2 …

男3 あんまり詮索しない方が良さそうですね。明日の集合場所と、時間だけ決めときたいんですけど…。

男2 …電話、入れときましようか。

男3 お願いできますか？

男2、ぼんやりどこか一点を見つめている男1に、

男2 あ、もしもし、田中君？

男1 …うん。

男2 今、どこ？

男1 …ん？…うん、家。

男2 ああ。

男1 …。

男2 あのだ、明日の集合場所と時間決めたいんだけどさ、

男1 …部屋がね、

男2 …ん？

男1 すげー散らかってる。

男2 …あ、そう。

男1 こんな散らかってたんだ。

男2 …、

男1 (微笑んで) こりゃあひどいや。

男2 …田中君、大丈夫？

男1 …、

男2 …、

男1 何時の飛行機だった？

男3 四時、ですね。

男2 四時だって。

男1 じゃあ四時。

男2 うん、それだとギリギリだな。一時間前には着いてないと。

男1 じゃあ三時？

男2 そうだね。

男1 わかった。

男2 …田中君？

男1 なに？

男2 帰って来てよ？

男1 …、

男2 帰ろうね、一緒に。

男1 …、

男1、立ち上がり、散歩する。

その辺りの景色を確かめるように見回している。

男2 …田中君？

男1 …、

男2 …もしもし？

男1 …、

男2 切れた。

男3 大丈夫ですかね？

男2 …これ、来ないつもりかもしれないですね。

男3 え、それは困ります…。

男2 なんて？

男3 だって一応お客様を送り届けるまでが仕事なので…、

男2 もし田中君来なかつたら俺一人で帰るのか…、ヤダなあ、十四時間かけてまた戻ってくるの。

男4 戻って来れるか、わからないじゃないですか。

男2 え？

男4 今度はカナダに着くかもしれない。

男2 …いやそれホント困ります！

男5、やって来る。

男5 それよりも、どっちに乗るんですか？国際線か国内線か。

男2 え？

男4 まず搭乗手続きをする時に、どこからどこへ行くのか、ちゃんと確認した方がいいです。

男5 来た時の搭乗券と、パスポートの事もちゃんと買った方がいいでしょうね。

男4 そうですね。

男2 …わかりました。

男5 だいたいあんな聞いた事ない航空会社を使うからダメなんです。通常だと日本からカナダまで十二時間で飞けるんです、それが十四時間もかかるなんて考えられない。現代の人はなんでも機械任せにしているからこんな事が起こるんです。これからは自分で考え判断して、すべてを疑ってかからないといけませんよ。どこに陰謀が隠されているかわからない。

男2 陰謀？

男4 いやあなたが予約したんでしょう？

男5 予約したのは私だけこのツアーを企画したのは別の担当ですから。

男4 どこまで行っても責任逃れですね。だから嫌なんですよ、サラリーマンは。

男5 君ね、ずっと思ってたんだが、そんなタクシー運転手は居ないからね。

男4 居ないかもしれないし、居るかもしれない。信じるか信じないかはあなた次第です。

男5 確かにね、じゃあ私は信じません。

男4 あなたが信じなくても居ますから現にココに。

男5 じゃああなた次第じゃないですか。

男3 言い争いはまたあとで、そろそろ時間なんです。

男3、男2にキャリーバッグを渡す。

女 来ませんね、田中さん…。

男3 電話 してもらっていいですか？

男2 …田中君、今どこ？ねえ、俺一人で乗るの嫌だよ。田中君来ないんだつたら俺も乗らないからね！

男3 …このまま、カナダに来たつもりで生活していく気なんです。

女 いいじゃないですかそれでも。帰りたくなつたらいつでも帰れるんですから。

男3 …そう、ですけど。

男2 …僕は、どうしたら？

男3 …お任せしますよ？

男2 …え？

男3 …ここがカナダだと思つたら帰つた方がいいですし、日本だと思つたら、まあどっちでもいいですし…。

男2 僕は日本だと思つてますよ最初から。

男3 じゃあ、お任せしますけど？

男2 …え。

男5 気持ちの問題ですよ、ケジメをつけるかつかないか。

男4 まあ、そうですね。

男2 …二十万以上払って、何をやってるんだ俺たちは。

男3 どうしますか？…もう搭乗手続きしないと間に合いませんよ？

男2 …いや、えー、でも腰が…、うーん、十四時間

女 あ、田中さんですよ！

男1、大きなお土産袋を抱えてやってきました。

男1 板谷くーん。

男2 田中君！

男2、駆け寄る。

男1 ごめんごめん、お土産買った。

男2 は？

男1 大変だったよ、全然無いんだもんカナダの物が。

男2 ああ…。

男3 さあ早くチェックイン済ませてください。

男1 あ、もうやりました。

男3 あ、え？

男1 じゃああの、お世話になりました。

男3 ああ、いえ、

男1 皆さんも、本当にお騒がせしました。またのちほど。

男4・5 …。

女、お辞儀をする。

男1 じゃあ行こう板谷君。

男2 …あ、うん…腰がなあ…、

二人、大慌てで去って行った。

男3、ホッと溜息をついた。

男5 確かに、人騒がせな人達でしたね。

男4 搭乗券確認するの忘れしました。

男5 クソ、どつちに乗ったんだ。

男4 国内線なら、成田まで行ってまた戻ってきますよね。

男5 …。

男3 …。

女 どうします？待ちます？

男5 …往復で、あと二時間？

男4 …。

女 行ってすぐって訳じゃないと思いますけど…。

男5 成田から中部国際空港に来る飛行機 分かります？

男3 私、帰りますね。

男5 え？

男3 もう仕事は終わったんで、

男5 …。

男3 はい。

女 でも田中さん、また「のちほど」って

男4 …なんて人だ。

男3 …これから、業務レポート書かなきゃいけないんですよ…。

男5 嘘のレポート書くんですか？

男3 …まあ。

男4 コーヒーでも、飲みに行きますか。

女 せっかくここまで皆で頑張つて来たんですから、ガイドさん。

男3 …はい。

上空を飛行機が飛んで行く。

空港ノイズ。

男5 これで戻って来なかったら、カナダに行ってるって事ですよ？

男4 行ってたらしいですね、カナダ。

男5 どつちの方がいいのやら。

別の場所に男1と男2が浮かぶ。

空港。

行きかう人々。

二人は辺りを注意深く見回している。

溶暗。

〜終〜

【上演記録】 2016年10月22日～30日 三鷹市芸術文化センター星のホール <MITAKA`next`Selection 17th>

2017年9月30日～10月1日 新潟古町えんとつシアター

2019年5月24日～26日 愛知県芸術劇場小ホール



この戯曲の著作権は、作者である平塚直隆にのみ帰属するものです。  
上演許可あるいはその他のお問い合わせは、作者の所属する「オイスターズ」までご連絡ください。

■ オイスターズ ■

ホームページ

<https://oysters.official.jp>

メールアドレス

[theatrical\\_unit\\_oysters@yahoo.co.jp](mailto:theatrical_unit_oysters@yahoo.co.jp)